

# 豊明希望チャペル礼拝

2026/3/26

「神の作品」

エペソ人への手紙 2 : 10

今日は、この有名な聖句から教えられたいと思っております。

**「実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」**(エペソ人への手紙 2 : 10)

特に、この言葉です。「**私たちは神の作品**」

人は、神の作品だと言います。神は、人を創造の初めに作られた被造物ですが、この書、エペソ人への手紙を書いているパウロは、被造物でも道具でもなく、作品だと言いました。神が作った作品だと。作品ですから、単に、神の道具という域さえも超えて、何もしなくても、ただ飾っておくだけでと言うか、そこにある、その存在だけで価値があるという意味です。

もちろん、この作品は、ここにあるように、ただ飾られているだけではなくて、良い行いをするというのです。ただ、パウロはこう付け加えます。その良い行いをも備えて下さっていると。何と言いましょうか、それは、存在だけですが、その存在そのものが、人々に影響を与え、いわば他の人を変える、人に影響を与える、そういう意味で、良い行いを引き起こすような存在だと、そういう存在として、神は、人を、とりわけ、イエス様を信じる人間は、作品として作られたというのです。

この場合の作品という言葉は、今もお話ししてきたように、ギリシャ語の意味でも、芸術作品という意味があるのですが、その作品が、良い事をなしていくというのです。



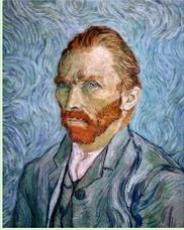
ちょっと不思議なのは、道具を作ったということであれば、その道具は、ハサミであれば、紙を切ったり、手紙の封を開けたりと、まさに良い行いをするわけですが、道具ではなくて、「作品」を作ったと言われ、その作品が、良い行いをするというのは、あまり、理解しがたい言い方だなあとと思います。

私は、絵画が好きなのですが(ルノアール、フェルメール展など・・・)、先月、名古屋美術館に来た、ゴッホ展に行ってきました。ゴッホはご存じでしょうか。こんな絵が有名でしょうか。ゴッホの「糸杉」です。



ゴッホは、オランダの画家で、時代は、日本で言えば江戸時代の終わりから明治時代(1853~1890)に書けて生きた人です。37才の生涯でしたが、特に日本人は、このゴッホが好きだと言われます。その彼も日本の浮世絵な

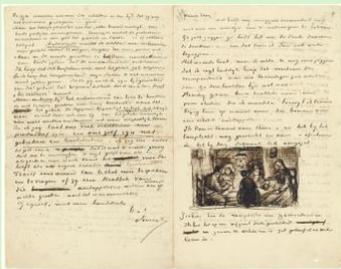
どが好きで、彼の想像の世界の日本の熱烈なファンでした。この絵(ゴッホの「種蒔く人」)も今回見る事が出来ましたが、日本の絵の影響を受けているっぽい絵ですね。また日本人が彼を好きなのは、彼の不遇の人生に心ひかれる面があるのかもしれない。



彼は、オランダの改革派の牧師の家系に生まれ、牧師を目指して、神学校に入学します。しかし、成績がいまいちであったのと、精神的な弱さがあったという事もあって、牧師見習いとしても熱心だったようですが、教会の人や、地域の弱い人にのめり込みすぎてしまって、助ける側が、家族からも、地域の人達からも心配される側になってしまったようです。今回、彼が、『キリストにならいて』というカトリックの修道士の本を、特に読んでいたと知りましたが、まさに修道士のように、聖書の生き方を生きようとしていて、それが理解されず、かえって体を壊して行ってしまったようです。38点の自画像のうちの一つですが、神経質な雰囲気が伝わってきます。



こんな絵も見たことがある方もおられると思います。これは、後年、おじいさんの牧師も心配して、彼を精神病院に入れ、入退院を繰り返しているとき、自分で自分の耳を切り落としてしまった時の絵です。そして、その後、彼は、銃で頭を撃って重傷を負った姿で発見され、その後、死亡します(自殺なのか、若者ともめて、打たれてしまったのか・・・諸説あるようですが・・・)。



彼の生涯は、めざした牧師になることに挫折し、好きになった恋人には、あまりにしつこいので、遠ざけられ、また、フランスの郊外に、家を借りて、友だちと一緒に絵をかきたいと願って、友だちの画家を待ちますが、あまりのしつこさに、遠ざけられ、それで、耳を切り落としたとも言われていますが、どうも人間家系がうまく築けない人でした(←今回展示されていた、彼の家族や友人への手紙)。かんじんの絵について言えば、彼の作品で、生前に売れたのは、一枚だけだったと言われる不遇な生涯でした。

彼を生活面で支え続けたのは、弟であり、兄の絵を誰よりも高く評価していたようでしたが、その弟も、ゴッホの死後、すぐに病死します。しかし、その弟の意を継いだ奥さんが、彼の作品が散逸しないように集めて、後世に残したのです。

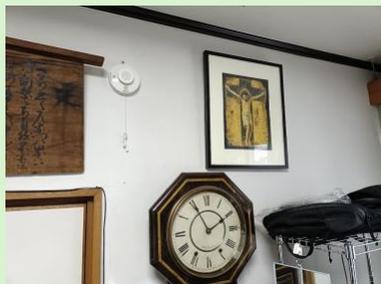
少し長い説明になりましたが、私は、変な事かも知れませんが、今日の聖句を読みながら、ずっと彼のことを考えていたのです。今一度聖書を読みますが。



**「実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良**

**い行いをあらかじめ備えてくださいました。」**

今回、名古屋での彼の展示会は、彼の世界観が体感出来るように、彼の生きたオランダ、フランス、さらには、彼の作品の世界に没入できるように、映像などを使って、工夫されたものでした。



彼は自画像をたくさん描いたといいましたが、自画像に限らず、それが、風景画であれなんであれ、すべての絵が、それを描いた画家の自画像なのだといわれることがあります。これは、私の牧師室の写真ですが、右上にあるキリストの磔刑(たっけい)の

絵は、私の中学生の時から友人 M 君の絵です。私は、この絵を見る度に、残念ながら、イエス様のことよりも、その M 君の、存在を感じるのです。M 君の臭い、笑顔、苦しみ、痛み、そのようなものを強烈に感じるのです。そもそも、このイエス様は、寸法がアジア人で、というより、やっぱり彼自身だと思うのです・・・

私は、今回、ゴッホの作品にあらためて触れて、ゴッホそのものに触れたように思いました。

今日の聖句を見ながらゴッホの事を思ったというのは、そういう意味でありませう。というのは、作品には、作者そのものが表されているということでもあります。

いささか強引だとは思いますが、今日の御言葉で、人が神の作品だと言う時、人には神の思いが表れているということでもあります。だから、神が良い行いを行うように、神の思いが表れた人間もまた、神の思いを、いわば自ずから、自然と、表していく存在だと言うことです。

神が良い行いをして、けっして悪い行いをしないように、神の作品として作られた人間も、自然と良い行いをしていって幸せを感じる、生きがいを感じる存在だと言うことでもあります。

別の言い方をすれば、神の作品である人間は、神の行う、良い事を行うことで、本来の価値、本来の人生、本来の生き方、幸せ、喜びを感じていく存在なのだと言うことです。

ですから、**人は、神を信じ、キリストによって神の子とされて、はじめて、人となる、少なくとも、神の作品である、あれるのだ**という事があります。

今日は、私が、ゴッホのことを思いながら、ゴッホの生き方に、あるいは存在に、日本の、世界の人達が、刺激されて、感動し、時には、その人の人生をも左右されているという話をしました。また、ゴッホが、あるいは、ゴッホの作品が、生前には、彼の思いは実を結ばないように見えただけで、今、今日の箇所例えば「良い行い」という実を、結ばせているのだなあ、勝手に感じたという話をしたので

す。  
私は、パウロが、あえて、私たちを、神の被造物と呼ばずに、「作品」と読んでくれたことに感謝します。それは、キリストを信じて、キリストのゆえに、神の子とされる人は、特にそうだからです。もはや被造物ではなく、神の作品である。だ

から、そのことを自覚し、神を信じ、キリストを信じて、私の作者である神がなしたい良きわざをなす存在となりたということでもあります。



今日は、第五週ですので、また、他にも色々とお話したいのですが、「共働学舎」という施設の話をしたと思います。この施設は、聖書の考え方を実践すべく建てられた施設です。この施設のホームページには、こういう紹介があります。

「1974年（昭和49年）、宮嶋眞一郎（元自由学園教師）の首唱のもと、心や体に不自由を抱える人たちと数人の仲間により、長野県小谷村で共働学舎は始まりました（立屋共働学舎）。現在まで5カ所で活動を続け、2024年に50周年を迎えます。」と。この宮嶋先生と、共働学舎を訪ねて、以前、教会の人達と訪問したことがありました。先生が、率先して、障害を持った方々と、土を耕し、パンを作って、共に生活をされていることに、深い感銘を受けたものです。

聖書にある、「良い行い」とは、たとえば、こういう事だと実感として分かったし、弱き人達の友となるという聖書の教えは、こういうことなのだと、ある種のショックを受けたことでもありました。共働学舎の案内にはこうあります。



「・・・人間一人一人は、調和ある真の平和社会をつくるために、誰もがが必要な存在として造られているのだと信じます。私達は、競争社会よりも愛による協力社会の方が、個人としても社会としても豊かになり得る事を信じます。そして、人格と人権とが神の前にすべて平等であることを信ずる時に、はじめてそれが可能となることを、日常の

生活の中にまず実証しなくてはなりません。**人間はすべて神の作品であると信じます。**

**神の作品には失敗作はありません。一つとして捨てられてよい不良作品は無い**

**はずです。創り主は自らの作品を愛します。**その一つ一つに完全者の性質が分け与えられていると信ずるならば、どうしてこれを互いに傷つけ、或いは無視することが出来るでしょうか。互いにこれを尊び喜び、その組合わせをよくする為に熱心に工夫し努力することが、よい社会（神の完全性に近づく）を造る原動力になると信じます。共働学舎は、この願いと祈りをもって始められた、独立自活を目指す教育社会、福祉集団、農業家族です。」

また、こんな事も書かれています。「(ここには、) 何もしたくない人、もう疲れたから休みたいという人、家族がいない人、いろいろな人がやってくる。ほとんどの人が自信も意欲もないまま、後ろ向きの状態で共働学舎にきます。問題は続出し、生産性は上がらず、農場の生活は楽にならない。でも変わるはずがないと思われていた人でも、主体性と自信を持った人に着実に変わってくる。自閉症だといわれた子も今では一生懸命仕事をして、みな心のつないでいる。・・・」と。

なるほど、神の愛とはこういうものだ、神に愛されている者、神の作品である者の生活とはこういうものだ、またここには、その作品達の実践があるのだと思ったのです。

どうか、神に帰って下さい。あなたが、神の作品である事に気づいて下さい。そのことに気づいた人だけが、人生を、幸福に歩むことが出来るのではないでしょ



うか。そして、果ては、よくぞ戻るべきところに戻ってきたと、神の国に迎えられます。

信仰者にも確認したのです。人は、また、私たちは、神の作品なのですから、神の作品らしく、「良い行い」に歩むなら・・・それは、ジグゾーパズルのよう

に、すでに用意されたピースが用意されているように、神は良きわざをすでに私たちの人生に常に用意して下さっているのですから、まるで、ジグゾーパズルの失われたマスターピースが見つかって、決められたところにキチッとハマって、作品が完成するように、良きわざを心がけ、実践し、神の芸術作品らしい本来の輝きを取り戻したいと願うのです。

今週の歩み、神の作品としての自分を喜び、神の作品として、神様の栄光を現す、「良い行い」の実践の歩みを、今週の歩みとさせて頂きましょう。